

巻頭言

信州公衆衛生学会をラダーに

公益社団法人長野県看護協会
会長 松本 清美

2006年8月に信州公衆衛生雑誌のVol.1 No.1が発刊されて17年になります。今回巻頭言を書かせていただくにあたり、Vol.1を再度読み返してみました。多くの職種、職場からの発表があり、あらためて、この学会が目指してきた相互理解の推進、情報交換の場となり、公衆衛生の向上に連動してきていることを感じました。

第1回の学会において私自身「思春期ピアカウンセラー・システムづくり事業の取り組みについて」という演題で発表の機会をいただきました。

思春期ピアカウンセラー事業に取り組み3年が経過したところでの経過をまとめ考察をしました。事業の1年目、2年目には長野県が主催している「健康づくり討論会」において「その1」「その2」として報告していたところ、当時の飯田保健所長であられた佐々木先生からお誘いを受けて、発表しました。事業をまとめ、振り返ることで課題や方向性が整理でき、他者へ伝える経験ができました。

2010年「長野県における平成19年、20年の自殺者の傾向について」2012年「薬物依存症に関連する精神保健相談対応のあり方」をテーマにした発表。その際投稿の執筆に背中を押していただき、大変な思いをしながらも寄稿までさせていただきました。

その後は後輩の皆様への発表への働きかけ、サポートを行ってきました。

2018年に作成した「長野県保健師 活動・人材育成指針」の中の長野県保健師のキャリアパスにおいて、求められる業務経験として「中堅前期で健康づくり研究討論会、中堅中期には信州公衆衛生学会、中堅後期には公衆衛生学会での発表。管理期には研究討論会、学会発表等へのサポート」を明記しました。

自身の経験からも、事業をまとめ、研究をすることは本人はもちろんですが、周りの後押し、サポートがとても重要だと考えます。

10月7日に「つなぐ看護多様な社会で生きる」をテーマに開かれます長野県看護研究学会の学会長となります。専門領域間で深めることも重要ですが、公衆衛生の現場で行われている様々な活動を知り、つながっていく場としての当学会の今後に期待いたします。